

第3部

グリーンランドの でんとう へんよう 伝統文化とその変容

第3部では、グリーンランドの伝統文化とその変容を、次の二つの時期から紹介します。

10世紀後半から15世紀半ばまでのノース人(バイキング)の活動時期、そして現在のグリーンランド人(グリーンランド・イヌイット、自称カラーリット)の祖先が到来した13世紀以降です。また、18世紀前半のデンマーク・ノルウェー連合王国による植民地化についても紹介します。

グリーンランド人とノース人

1200年頃、現在のグリーンランド人の祖先であるイヌイットたちがアラスカからグリーンランドにやってきました。彼らは捕鯨を^{ほげい けいざい きばん}経済基盤とする^{にな}チューレ文化の担い手でした。

また、^{おん だん き}温暖期の10世紀後半から15世紀半ばまでノース人(バイキング)がグリーンランド南西部に住みつき、^{ぼく ちく}羊の牧畜や^{さい ばい}大麦の栽培を行っていました。

^{かん れい か}寒冷化が進むと、15世紀前半にグリーンランドからノース人が姿を消しました。一方、イヌイットはグリーンランド南部にも住むようになりました。

1721年にはデンマーク・ノルウェー連合王国が宣教師ハンス・エゲデをグリーンランド西部に^{は けん}派遣しました。その後、同連合王国によるキリスト教の^{ふ きょう}布教と植民地化が進められました。連合王国が^{かいしやう}解消された後も、デンマークによるグリーンランド^{し はい}支配は続きましたが、1979年にグリーンランドに^{せい ふ}自治政府が設立され、^{せい じ}政治的自立化が^{じつ げん}実現しました。

グリーンランド歴史年表

(10世紀～14世紀 中世の温暖化期)

| | |
|--------|--|
| 982年 | 殺人罪 ^{ざい} のためにアイスランドから追放されたノース人、赤毛のエイリーク(エリック)がグリーンランド南西部 ^{とう ちやく} に到着。 |
| 986年 | ノース人によるグリーンランド南西部への植民の開始。 |
| 1200年頃 | チューレ文化の担い手であるイヌイットの祖先がグリーンランド ^{とう たつ} に到達。 |

(14世紀半ばから19世紀半ば 小氷河期^{しょうひょう が き})

| | |
|--------|--|
| 15世紀前半 | ノース人がグリーンランドから姿を消す。 |
| 16世紀 | ヨーロッパ人の捕鯨者がグリーンランド ^{おき おとす} 沖を訪れる。 |
| 1721年 | デンマーク・ノルウェー連合王国から派遣された宣教師ハンス・エゲデらが交易基地 ^{こう えき き ち かい せつ} を開設するとともに、グリーンランド西部地域で布教活動を開始。 |
| 1776年 | 王立グリーンランド ^{ぼう えき} 貿易会社はグリーンランドにおける交易 ^{どく せん} を独占。植民地支配の開始。 |
| 1861年 | グリーンランド語の新聞「アトゥアギシウチット」 ^{はっ かん} の発刊。 |

(19世紀後半から気温の上昇^{じょうしやう})

| | |
|---------------|---|
| 1953年 | デンマークの一地方 ^{どう かく} と同格 ^{かく とく} の地位を獲得。デンマークの市民権 ^{けん あた} が与えられる。 |
| 1950年代～1960年代 | デンマーク ^{しゅ どう} 主導 ^{しゅ どう} の開発計画の実施により急速な近代化(デンマーク化)。 |
| 1950年代～1970年代 | 急激 ^{きゅうげき} な人口増加 ^{ぞう 加} と都市や町への人口集中化。 |
| 1979年 | グリーンランド自治政府が成立し、デンマークの自治領 ^{りやう} となる。 |

衣い類るい

グリーンランド人は、野生トナカイやアザラシの毛皮で外とう(上着)とズボンを、アザラシ皮てぶくるで手袋や靴くつを作りました。野生トナカイの毛皮は防寒性ぼうかんせいと保温性ほおんせいに富み、アザラシ皮は防水性ぼうすいせいと保温性ほおんせいに富み、丈夫じょうぶでした。彼らの毛皮服は世界最高水準すいじゅんの防寒ぼうかん着ぎです。

なお、展示パネルの写真はどちらもグリーンランド国立博物館・文書館の提供によるものです。

日よけ

^{こういど}高緯度に位置するグリーンランドでは春になると日照時間が長くなり、^{せっぴょう}雪氷からの照り返しが強くなります。また、6月から8月にかけては^{びやくや}白夜が続きます。太陽光が強い季節に活動するためには、スノーマスクや日よけが必要でした。

食

グリーンランド人は、アザラシやセイウチ、シロイルカ、野生トナカイ、ジャコウウシ、ホッキョクイワナ、ホンケワタカモなどを食べました。野いちご類と海草のぞを除けば、植物食はほとんどありませんでした。料理の基本きほんは煮る、干す、発酵はっこうさせる、生のままれい(冷凍とうふくを含む)でした。生食することで、動物の脂肪しぼうや血液けつえきからビタミンを摂取せつしゆすることができました。

生活用具

グリーンランド人は、動物の^{きば}牙や^{ほね}骨、^{えだつの}枝角、毛皮、そして流木、石を利用して生活に必要な^{しゅりょう}狩猟道具をはじめとするさまざまな生活用具を作りました。ノース人やヨーロッパからやってきた捕鯨者、デンマーク人との交易によって、鉄や^{どう}銅などの^{きんぞく}金属や^{ぬの}布地、糸、針、ナイフ、やかんなどを入手するようになると生活用具が^{じよ}徐々に^{じよ}変化していきました。

住

グリーンランド人は、冬には半地下式の^{しば っち}芝土(植物の混じったツンドラの表土)の家に住み、夏になるとアザラシ皮製^{せい}テントで生活をしていました。また、グリーンランド北西部では、冬にドーム型の雪の家に住むこともありました。彼らは、石ランプを用い、^{だん}暖と^{みつ ぶう せい}明かりを^{ほ おん せい}とりました。密封性と保温性の高い芝土の家や皮製テントでは、石ランプだけで十分な暖をとることができました。19世紀前半ごろにデンマーク人から材木^{もく せいじゅう たく}を入手するようになると、徐々に木製住宅を建てて住むようになりました。

1年のサイクル

グリーンランド人の1年の生活は、季節の変化とそれに連動する狩猟動物、鳥、魚の分布^{ぶん ぶ}の変化と密接^{みつ せつ}にかかわっていました。夏になると海岸^{か せん}や河川の近くに移動^{い どう}し、テントに住みながらアザラシや鳥、魚をとりました。一方、冬から春にかけては半地下式の芝土^{かい ひょう}の家に住みながら海氷上でアザラシを、内陸で野生トナカイなどをとっていました。

狩獵と漁労

広大なグリーンランドでは地域や時期によってとれる動物や魚の種類に^{ちが}違いが見られました。狩獵と漁労は、グリーンランド人が生きていく上でもっとも重要な活動でした。グリーンランド北部では、冬から春にかけて氷上や水ぎわで、夏には海上でアザラシをとっていました。また、夏には川や海岸でカラフトシシャモやホッキョクイワナをとっていました。春と夏には^{ゆみ や つか}弓矢を使って野生トナカイをとることもありました。

おもちゃ

グリーンランド人は、ホッキョクグマやイッカクなど動物のミニチュアのおもちゃを流木で作ったり、動物の骨を利用してけん玉を作ったりしました。子どもたちは遊びを通して動物のことや狩猟のやり方を学び、狩猟や裁縫さいほうに必要となる手の器用さを訓練しました。

宗 教

グリーンランド人の宗教は、すべての生き物やモノに靈魂が宿っていると考えるアニミズムとアンガコック(シャーマン)と^よ呼ばれる宗教的職能者が中心的な役割を果たすシャーマニズムでした。悪靈がイヌイトを^{おそ}襲った場合やイヌイトが決まりをやぶって靈をおこらせた場合、病気になる^{え もの}たり、獲物がとれなくなると信じていました。悪いことが起こった時には、シャーマンに^{げん いん}原因や^{かい けつ}解決方法を聞き、助けられました。

世界観

グリーンランド人にはもともと、キリスト教やイスラム教のような「神」の考え方がありませんでしたが、海に住む女神が海の動物や魚を支配し はいしていると考えていました。また、彼らはすべての生き物に「イヌア」と呼ばれる靈魂がやどっており、それが人間や動物を生かしていると考えていました。さらに、動物は人間のために自らの意志い しで捕獲ほ かくされにきてくれているため、人間が感謝かん しゃと尊敬そん けいの念をこめて捕獲し、その靈魂を「動物の主」のもとぬしに送り返すと、再び動物の姿ぶたたをして人間のもとすかたに戻もどってくると信じていました。

移い動どう

グリーンランド人は、獲物を求めて居住地を季節的きよ じゆうに移動しゆ だんしました。夏の移動手段は、ウミアック(大型皮製せいボート)とカヤック(小型皮製せいボート)でした。ウミアックには5～10人が乗ることができ、長い距離きよ りを移動する時やクジラなど大型動物を狩猟する時に利用しました。一方、1人乗り用のカヤックは、おもにアザラシなどを狩猟するために利用しました。冬の移動手段は、数頭の犬にそりを引かせる犬ぞりで、移動や狩猟に利用しました。

みんなくのグリーンランド資料

この展示では、みんなくが所蔵している旧東京大学理学部人類学教室資料と日本民族学協会附属民族学博物館資料、植村直己資料の中からグリーンランドに関連する資料を展示しています。前二者の資料は、国立民族学博物館の創設にあたり、所蔵先の東京大学理学部と旧文部省史料館から移管されたもので、来歴は次のとおりです。

旧東京大学理学部人類学教室資料のグリーンランド関連資料は、1927年にデンマーク国立博物館のトムセン博士が、沢敬三らの仲介によって、東京帝国大学人類学教室の松村瞭博士に贈ったグリーンランド資料およびデンマークの石器資料、約100点です。日本からはそのお返しとして、1929年に日本の石器やアイヌの儀礼道具などをデンマーク国立博物館に贈りました。

日本民族学協会附属民族学博物館資料のグリーンランド関連資料は、1954年にデンマーク国立博物館のカイ・ビルケット＝スミスから日本民族学協会の岡正雄に贈られたものです。そのお返しに同年7月に日本からデンマーク国立博物館に日本の考古学資料などを贈りました。

展示品のキャプションでは、以下のとおり略字で表示しています。

旧東京大学理学部人類学教室資料→旧東大

日本民族学協会附属民族学博物館資料→民協

植村直己資料→植村

デンマーク人の到来と植民地化

デンマーク・ノルウェー連合王国は、1721年に宣教師ハンス・エゲデをグリーンランドへと派遣はけんしました。その目的は、15世紀前半にグリーンランドで消息を絶たったノース人のその後の状況じょうきょうを調べるためとキリスト教を布教するためでした。エゲデらはグリーンランド人にキリスト教を広め、交易を行いました。その後、デンマーク人はグリーンランドを植民地化し、彼らを政治経済的に支配するようになりました。